

それでモーセは主のもとに戻り、そして言った。・・・ 出エジプト 5：22 節

牧師を始めた頃、一人の女子高校生がイエス様信じました。「四つの法則」で最後まで学び、フォローアップもきちんとしてました。彼女は「これから聖書を学び、祈り、証、礼拝出席します」と言って元気に帰って行きました。ところが翌日電話がありました。「話をしたい」とのこと。彼女は、家に帰って喜んで親に証をしたのですが、親から大反対されました。「これから絶対に教会に行ってはならない」と言われたそうです。彼女はガッカリしてました。信仰を持ったその時から、闘いは始まったのでした。

イスラエルの民も、モーセ、アロンを指導者に迎えて、いよいよ大きな前進を！ と思った矢先、問題が起きました。

——— 闘い開始 ———

(5：1～5 節) 1 節、「その後、モーセとアロンはファラオのところへ行き、そして言った。イスラエルの神、主はこう仰せられます。『わたしの民を去らせ、荒野でわたしのために祭りを行えるようにせよ。』」二人は「荒野に行って、そこで主を礼拝させて欲しい」と頼んだのです。イスラエルの神様、主の命令をそのままファラオに伝えたはずでした。

2 節、それに対してファラオの答えは「主とは何者だ。私とその声を聞いて、イスラエルを去らせなければならないとは。私は主を知らない。イスラエルは去らせない。」でした。

ファラオは全く二人の願いを受け入れませんでした。

(3 節、読む) それでも、なおも二人は熱心にファラオに頼みました。

(4 節、読む) しかし、ファラオの二人に対する態度は厳しいものでした。ファラオは言いました。「イスラエルの人々が主を礼拝するのは勝手である。しかし、その主がこの私と何の関係があるというのか。」そして更に

(5 節、読む) 「お前たちは怠け者だからその様なことを言い出すのだ」と、一方的に決めつけるのでした。

(6～9 節、読む) ファラオの考えはこうでした。「宗教は怠け者の隠れ蓑だ。怠けたいので、神を礼拝したいなどと言うのだ。」

さて、今日でも同じように考える人も多いようです。「仕事、勉強に熱心な者は、信仰など持つ時間はない。神を礼拝することと、勤労とは絶対に両立はしない。」でもどうでしょうか、この様な考え方は間違っていると思います。イエス様は次の様に言いました。

マタイ 4：4 節「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生

きる」 実は、真の礼拝を神様に献げる者は、心からの熱情を傾けて仕事も学びをも出来ると、言うのです。

例えば、かまをとぐことは、草を刈るのに邪魔にはなりません。返ってそれは絶対に必要な備えなのです。包丁もきちんと研ぐと、調理がはかどります。それと同じですね。

礼拝を捧げることが、より良い働きをすることが出来るはずなのです。エジプトにとってのも良きことなのですが、ファラオは何も理解していませんでした。

(10～14 節) 10 節、そこで、この民の監督たちとかしらたちは出て行って、民に告げた。「ファラオはこう言われる。『もうお前たちに藁はあたえない。・・・』」 このようにエジプトの監督とかしらたちはファラオの命令を受けて、イスラエルの人々に藁を与えないでレンガを造るように命令をしました。

それにしても、今ファラオが命令したことは、どこまでも道理を無視した、全く思いやりのない、悪辣な態度であり、神様に対しての反逆でした。まさに神様に弓ひく態度でした。

(例話) 昔シーザーが野外で大宴会を催していました。その時あいにく非常な雨が降ってきました。怒ったシーザーは家来に言いました。「ジュピターはけしからん、皆彼を射よ！」彼の家来たちはすべて全員が弓を張って天を射たのでした。しかし、やがて、落ちてきた矢のために多くの死傷者が出たのです。

ことわざで「天を射る者は自らを射る。天につばを吐く者は、自らが受ける」とある通りです。 今、まさにファラオは真の神に向けて矢を放っているのです。

イスラエルの人々は礼拝をしたいという願いを出しましたが、エジプト人からひどい仕打ちを受けました。いつの世も、同じです。サタンは私たちが礼拝をしようとする時に、反対し、抵抗を試みるのです。

(15～21 節) 「15、16 節、そこで、イスラエルの子らのかしらたちは、ファラオのところに行って、叫んだ。『なぜ、あなた様はしもべどもに、このようなことをなさるのですか。・・・』 17 節「ファラオは言った。『お前たちは怠け者なのだ・・・18 節、今すぐに行って働け・・・』」

益々事態は悪くなる一方です。19 節、イスラエルの人々はファラオの命令が以前より厳しくなったその原因が、20 節、モーセとアロンのせいであることを知り、21 節、二人の所に詰め寄り責めました。「モーセとアロンよ、あなた達は、私たちをファラオと、その家来たちに嫌わせて、剣を彼らの手に渡して、私たちを殺させようとしています。」イスラエルの人々はモーセとアロンがなまじっか余計なことをしたばかりに、自分たちは前よりも苦しい状態に置かれていることを悔やんでいるのです。そして、二人を責めるのでした

それにしても、今まではエジプトの王、ファラオとの戦いでしたが、今度はイスラエルの人々との争いとなりました。今、イスラエルの人々は、自分たちの指導者モーセ、アロンを攻撃しているのです。内輪もめになってしまいました。

(22、23 節、読む) それにしても、なぜこのようなことが起こってしまったのでしょうか？
今、モーセは何が何だか分からなくなって混乱しています。

2 つ原因があると思います。

——— 欠けていた主のことば ———

・その 1、1 節のモーセとアロンがファラオに神様のことばを伝えている所ですが、4：22 節と 5：1 節とを比較すると「主はこう言われる『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。・・・』という主のことばが 5：1 節にはありません、削られています。モーセは神様が二人に語ったおことば通り、全てをファラオに語るべきでした。神様から聞いたとおりにきちんと語っていれば、2 節の「主とは何者だ。」といった議論にはならなかったでしょう。

——— 余計なことを語った ———

・その 2、3 節ではモーセたちは余計なこと、間違ったことを言っています。「・・・そうではないと、主は疫病か剣で私たちを打たれます。」ここでは、(3：18 節、読む) と比較すると、主が語っていないことを付け加えました。何故でしょう？ 神様は罰を与える怖い神様であると言って、ファラオから同情を得ようと思ったからでしょうか？

——— みことばが命じていること ———

申命記 4：2 節「私があなたがたに命じることばにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を守らなければならない。」
黙示録 22：18、19 節「私は、この書の預言のことばを聞くすべての者に証しする。もし、だれかがこれにつけ加えるなら、神がその者に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。」

——— 主のもとに戻り ———

み言葉を変えたことにより、結果は、イスラエル人の苦しみは増し加わり、同胞からも突き上げられることになりました。みことばは絶対に変えてはなりませんね。足しても引いてもいけません。でもこの後、モーセは人間的なやり方を捨てて、神に立ち返ります。そして 22 節に記されているように、「モーセは主のもとに戻り、・・・言った」祈るのです。モーセは祈りの人でした。モーセの偉大さは、心の憤懣（ふんまん）を、人にぶちまけるのではなく、祈りのうちに神様に申し上げたことにあります。これが献身したモーセの生涯を通して一貫して見られた態度でした。私たちも絶望の中で、どうしてよいか、分からなくなった時、でも最後に一つのことは出来ます。それは祈りです。モーセも又、神様からの助けを仰ぎました。あの偉大なモーセも最後は祈りでした。こうして全知全能なるお方と一つになったのです。戦いはこれからです。モーセは神と共にいよいよ闘いの場へと向かうのでした。